

身体としての言語

Language as body

篠原和子^{*1}
Kazuko Shinohara

川原繁人^{*2}
Shigeto Kawahara

本間武蔵^{*3}
Musashi Honma

^{*1} 東京農工大学
Tokyo University of Agriculture and Technology

^{*2} 慶應大学
Keio University

^{*3} 都立神経病院
Tokyo Metropolitan Neurological Hospital

Linguistics as an academic discipline has long pursued generalization of principles governing structures and/or functions of human language. Although the enterprise has achieved a substantial accumulation of insights into the nature of language, most of these investigations have neglected the voice (sounds) of each individual speaker, which is fundamentally based on each person's body. Taking an example from development of a software for medical support, we argue that more attention should be paid to the individuality of language.

1. はじめに

言語の本来の在処は、個人の身体である。特に音声言語の存在は、個人の「声」にその基盤がある。本発表では、難病医療の現場で、声を失う患者に本人の声による発話を可能にするツールを無償提供する試みを紹介し、このツールの改善を言語学の応用事例として考えながら、現代言語学が声の個人性を捨象するところに成立してきた経緯を批判的に論じ、言語音の身体性について考察する。

2. 現代言語学における「個人」の捨象と身体

2.1 現代言語学の成立: 19 世紀

現代言語学がいつ頃成立したかには幾つかの見解があるが、一般に理解されているところでは、19 世紀に歴史言語学が発足し言語学会が成立した時期と言われている。数千年スパンでみる言語の系統的親族関係を同定し、祖語の復元を試みる分野だが、当然のことながらそこでは個別言語それぞれがひとつの実体とみなされることで研究対象とされてきた。つまり言語は個人から離れてその個別言語というものの自体が実在するものと見なされ、「個体」の変化のように個別言語の変化が扱われたのである。

2.2 システムとしての言語: 20 世紀初頭

20 世紀初頭に[Saussure1916]が言語を記号の体系としてみることが提議して以来、言語学は言語をシステムとして捉え、そこに存在する規則性を抽出して一般化することを責務としてきた。これは現在に至るまで引き継がれている。

2.3 認知構造としての言語: 20 世紀後半以降

20 世紀後半、認知的視点が導入されたが、殊に 20 世紀後半の理論言語学を先導した [Chomsky 1965]の生成文法理論では、言語の担い手は現実に存在する個人ではなく、理想化され抽象化された、あらゆる誤謬や間違いや不完全さから自由な言語使用者 (idealized speaker-hearer) であると仮定され、その仮定の上で文法構造などが理論化されていった。

2.4 身体性の視点

20 世紀終盤から発展してきた認知言語学では、それまで顧みられなかった言語と身体の間を正面から捉える視点が導入された ([Johnson 1987], [Lakoff & Johnson 1999]ほか)。これは身体知と言語の関連を探求する上では大きな思想的進展と言えるが、認知言語学もまた一般化を主たる責務とするそれまでの言語学の流れの中に依然としてあり、言語が本質的に個人の身体の個別性に依存しているものであることが十分に捉えられには至っていない。

3. 「その人の言葉」としての言語

言語が「他者に通じること」を必須としている以上、言語は個人性を超えなくては存在できない。にもかかわらず、言語は言葉であり、言葉はそれを発する個人の存在、つまり個人性を前提としている。この矛盾は、学問が総じて一般化を行わざるを得ない宿命にあることが元々孕んでいるものかもしれない。個人性というものは、[木村 2008/1983]の言うように「私が私(自分)であること」を認識する人間においてのみ問題となる現象と思われるが、それ故、物理学等の非生命的、非自的現象を対象とする学問とは、その基盤が異なると考えなくてはならないのではないだろうか。個人性は、最終的に一般化され得ず、「私性」を免れない。これは言語学にとっては都合よく感じられないことである。しかし言葉を対象とする以上、このことを終始無視しつづけることもできない。

3.1 言葉の「その人性」の表れる場としての「声」

本発表では、言語の「私性」「その人性」が顕著に表れる場としての「声」を例にとりて考える(勿論これらが表れる場は「声」には限られない。口癖や語りの特徴、言い間違いや誤用なども「その人性」の指標となりうる。ここではこれらすべてを扱うことは控え、「声」に限定する)。

言語音の研究は音声学の分野で行われているが、個人の音声データを用いた研究であっても、それを個別言語(の話者)として一般化する。特定の個別言語の音というものが自律的に存在するという前提があるように見える。その前提は、一般化し法則性を抽出しようとする学問分野としては必然である。一般化するレベルが個別言語であれば個別言語そのものを単体として実体化して措定しなくてはならない。そのこと自体を批判するものではないが、少なくとも言語の「私性」はそこから取り出せない。

「私性」は自己と他者の狭間(木村のいう「あいだ」)に成立するものであり、他者が自己と異なる主体であることを認識するためには他者の身体と自己の身体との交換不可能性を認識することが前提となる。その交換不可能性の認識は、「脳に蓄えられた記憶」といった現代的共同幻想を持ち出す以前に、単純に「他人の身体のある空間を自分は占めることが出来ない」という認識である。「他者の身体を占めているその他者の意識が在る」と感じるものが、逆に「私」の「私性」の基盤となる。「声」が問題であるのは、声は、言語という共同体の共有物の媒介でありつつ、同時に他者の身体の物理的特性に依存して造り出されるものであるために、「自分とは異なる声」を他者がもつことの認識、つまり他者の他者性の基本的認識に繋がるからである。

3.2 言葉の「私性」「その人性」をどう探求するのか

結論を出すことを控え、問いを提示しておくに留める。19世紀以来の擬似科学としての言語学は、そもそも完全には客体化しつくせない言語を物理現象になぞらえて科学的探求の対象として捉えようとしてきた。そのことの限界を認め、「私性」「その人性」(自己の成立そのものに関わる「かけがえのなさ」)を展望できる言語探求の方法論を編み出すことを、我々は自らの課題とするのか、しないのか。それは真偽の問題ではなく、決断と投企の問題であると我々は考える。

4. 声に表れる「その人性」

言語の主たる機能が情報伝達であるとしたら、重要なのは情報であり、その媒体である「音声」は二次的存在となる。その場合、声は誰の声でもよく、情報が伝われば用は足りる。しかし私たち人間にとって、言葉を伝える声は情報を主とする二次的媒介物に過ぎないのではない、ということ、医療現場での取り組みから見てみたい。

ここで取り上げるのは、都立神経病院でALS(筋萎縮性側索硬化症)の患者が使っている「今の声を録音しておいて、声が出なくなったときに使う」([本間 2012])「無償ソフト」「マイボイス」である。ALS患者が呼吸器装着により声を失うに際して、本人の声で近い人に言葉を伝えることを可能にした。患者が日本語の言語音を音節(モーラ、拍)ごとにあらかじめ録音し、後に患者が「スイッチ」(手動操作によるキーボードや、微細な筋肉の動きを感知する装置など、病気の進行状況によって変化する)を自分の意志で操作することにより作成した文を音声出力するソフトである。肢体不自由のハンディキャップをもつ人が簡単にコンピュータ画面上で文字入力ができるように開発された「ハーティラダー」というソフト[吉村 2000]を利用し、打ち込まれた文字列を本人の声で音声出力するよう改良したもので、第3著

者が都立神経病院にて使用・開発中である。日本語の音節約150種類を予め録音し、それを利用することであらゆる組み合わせによる新規の文の音声出力が可能になる。同様のソフトは他でも商業ベースで開発されており高額な技術を使うことによって出力音声の自然さや聞こえの精度は上がるが、高額な費用がかかり患者と家族にとって利用可能性が極めて低いため、これを無償にできる無料ソフトのみで実現しようとしているのが「マイボイス」である。そのため聞こえの精度に課題があり、現在の要改善点は音節の連結部分の自然さの向上、ピッチやイントネーションなどの処理である。

マイボイスの利用者の声から、「自分の声だからこそ、心の声」「分身」など、自分の言葉の私性を支える自分の声の重要性が伺える。また介護する側にとっても、その人そのものの声を聞けることが励ましになっている([本間 2013])。

死に直面するという事態において、介護の観点からは情報そのもの(何をしたいか等)が重要であると思われがちであろうが、「本人の声」でそれが語られることによる交流の重要性には、看過できないものがある。「マイボイス」の無償提供への技術的取り組みは無論重要だが、本発表では「なぜ本人の声である必要があるのか」という観点から、声の「その人性」の重要性、そしてそれが言語学にとって何を意味するかを問いとして提示したい。学問が追究しうる真理には、人間の心にとって必要ないものもあるが、人間にとって何が必要であるのかを考える「柔らかな視線」を言語研究に組み込めるのかどうか、という問いである。現在のところ、これはまだ問いかけであるに過ぎない。

参考文献

- [Saussure 1916] Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de Linguistique Générale*. Payot.
- [Chomsky 1965] Chomsky, Noam (1965) *Aspects of Theories of Syntax*. MIT Press.
- [木村 2008/1983] 木村敏 (2008/1983)『自分と言うこと』ちくま学芸文庫/第三文明社.
- [Johnson 1987] Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. The University of Chicago Press.
- [Lakoff & Johnson 1991] Lakoff, George, & Johnson, Mark (1991) *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
- [本間 2012] 本間武蔵 (2012)「自分の声をのこす」都立神経病院地域医療連携ニュース, 在学療養ふれあい広場, 第 37 号.
- [本間 2013] 本間武蔵 (2013)「マイボイスで自分の声を使い続ける」慶應大学特別講義配布資料, 2013 年 12 月 9 日.
- [吉村 2000] 吉村隆樹 <http://takaki.la.coocan.jp/heartly/>